

自己評価報告書(最終報告)

| | | | |
|-------|------------|-------|-------|
| コース等名 | 芸術系コース(音楽) | 記載責任者 | 頃安 利秀 |
|-------|------------|-------|-------|

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 大学院の学生定員の充足

貴専攻・コースにおける過去5年間の大学院学生定員充足状況を分析・検証し、達成目標を設定するとともに、どのような具体的方策を立てて、目標達成に向けて取り組んでいくかを示して欲しい。

1. 目標・計画

平成18年度から今日に至る大学院新入生の人数の動向を振り返ると、平成18年度は15人と目標人数に達しているが、それ以降は19年度9人、20年度10人、21年度6人、22年度6人と減少している。

平成23年度の新入生は12人と、これまでの4年間と比較すると若干増加しているが、今後一人でも受験生を増やすには、音楽コースの教育指導の内容と特色を少しでも多くの方々に知っていただくことが大切だと考え、以下のような計画により活動を行い、大学院学生定員の充足を目指す。

- ①コース紹介のパンフレットの作成やホームページのさらなる充実を図り、広報活動をより機能的にする。
- ②教員の出演する演奏会等でコース紹介パンフレットを配布するなどの広報活動を行う。
- ③教員が参加する学会、公開講座、共同研究、教育支援事業などの活動を通して、当該コース紹介パンフレットを配布し、特に長期履修制度を周知し、音楽領域の教育者、研究者、学生や一般人への広報活動を積極的に実施することにより、本学大学院への進学の有効性をアピールする。
- ④コース教員個々が他大学、専門大学との交流を深め、それらの大学教員を訪問する機会を積極的につくり、個別の広報活動を実施する。
- ⑤学部4年生に対し、大学院進学への進学意識を高めるために、クラス担当教員や各指導教員、あるいは必要に応じて大学院生との懇談会を開催し、その進学の意義を説明する機会を設ける。
- ⑥コースの同窓会組織との連携による広報活動を実施する。

2. 点検・評価

①コース紹介のパンフレットの内容を改編し、広報活動に利用した。ホームページに関してはシステムの変更や内容について検討を行った。②コース教員が出演する演奏会等でパンフレットの配布を行った。③免許更新講習と10年次経験者研修において、受講者に大学院の情報を紹介した。教員の参加した会合においてコース紹介パンフレットを配布し、長期履修制度の説明を行った。コンクールの審査等で同席した他大学の先生方に、本大学院のパンフレットなどを配布し、広報活動を行なった。④愛知県立芸術大学の教員に音楽コースと大学院のパンフレットを送付し、学生への周知をお願いした。くらしき作陽大学の教員にパンフレットの送付及び電話による個別の広報を実施した。⑤学部3、4年生に対して、大学院へ進学することの意義を説明し、受験を勧めた。音楽コースの大学院在学学生を通して学生募集への協力を依頼した。卒業研究を指導する学部4年生、及び3年生に対して、大学院へ進学することの意義を説明し、受験を勧めた。⑥同窓会「潮音会」の会報にコース案内を同封してもらった。

I-2. 学生支援の取り組み

学生の卒業時・修了時における「質」保証のためには、常日頃から学生に対する支援を推進していくことが必要である。

貴専攻・コースにおけるこれまでの学生支援の取り組み状況を分析・把握し、本年度どのような学生支援の取り組みを行うか、具体的な方策を示して欲しい。

1. 目標・計画

本コースでは、これまで学生の個性や能力を伸ばすために、授業や学習支援においてきめの細かい指導体制で臨んできた。また就職支援においては、各種実技指導や小論文作成などの個別指導、面接試験や集団討論を想定した演習による指導等を行ってきた。

平成23年度では、これまでの指導体制を崩すことなく、さらに内容の充実を図っていく。特に人数が増加した長期履修学生に対して授業の「質」を落とすことなく対応できるようにしたい。また音楽コースの学生に対しては、学生一人一人の音楽的な能力を十分に伸ばし、それを発揮できる場を多く設け、学生個々の実質的な成長を促進していきたい。そのために以下のことを計画する。

- ①大学院の学校教員養成プログラムにより、近年急増しつつある長期履修学生の学部における受講授業の質を保証するため、平成23年度より『初等音楽科教育論』および『保育内容』(表現Ⅰ)について、授業をAおよびBのふたつのクラスに分けて開講し、授業の質を高める。
- ②在学生(学部・大学院)による学内での研究発表会や演奏会を開催し、その内容の充実と学生と教員との交流を促進する。
- ③学生一人一人の個性と能力に応じた教育指導を行い、教員採用試験に向けてこれまで以上に支援体制を整える。
- ④「卒業研究」や「課題研究」において、必要に応じ指導教員以外の指導を受けられるようにし、コース内全教員によるきめの細かい協力指導体制を維持する。

2. 点検・評価

①『初等音楽科教育論』および『保育内容(表現Ⅰ)』を学部生向けと大学院生向けのAB二つの授業に分けて実施した。②年2回の学内演奏会及び卒業・修了演奏会の開催と、開催後に反省と親睦を踏まえて学生と教員との交流会を行った。③4年生の授業の中で、面接試験や集団討論のロールプレイを実施し、一人ひとりのコミュニケーション能力が鍛えられるように指導した。またメールを活用して、小論文執筆の添削指導を行った。学部3年生の希望者に対して、教員採用試験の対策としてピアノ初見視奏の課題を紹介し、実施した。作曲の授業において、学生一人一人の個性と能力に応じた指導を行い、作品発表を通して、各人に音楽のすばらしさを実感させた。また、教員採用試験に向けて、創作、音楽理論、聴音等の指導を毎週行った。教員採用試験で聴音が課される学生に対して授業時間外に特別指導を行なった。採用試験でリコーダーの試験がある学生に対して具体的な演奏法や初見演奏の指導を行った。教員の各専門領域において教員採用試験に係る補習授業等支援体制を構築している。④論文執筆のために行われる専門書の読み方について、文脈の把握と内容の要約、自らの研究課題に沿った内容の意味づけが基礎的なスキルであることを講義の中でガイドした。「卒業研究」「課題研究」において、声楽分野、管楽器分野のピアノ伴奏についての指導を行なった。このように、コース内全教員によるきめの細かい協力指導体制を維持することができた。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

教育支援については、平成17年度から実施している教員養成コア・カリキュラムをさらに充実させ、平成22年度学部入学生から開設される教職実践演習にスムーズに連結できるように、教育指導体制を確立させていく。そのために以下の内容を検討、また改善を図る。

①第1コア授業「初等中等教育実践基礎演習」において、学生が大学生活にできるだけ早く適応し、意欲的に授業に参加し、学校教員としての任務と仕事内容について十分に理解できるようにする。

②第2コア授業「初等中等教科教育実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の内容について、教科専門と教科教育の教員のコラボレーションを進め、教育現場の教員との連携を深めながら、教育実習に十分対応できる教育実践能力を高めていく。また学修キャリアノートの充実を図り、教職実践演習へのスムーズな連結を図る。

学生生活支援については、学生一人一人の個性と能力を伸ばす観点から、これまでの指導体制を崩すことなく、さらに内容を検討し改善・充実させる。

①各学年の担任教員と学生との懇談会や、コースの全学生と教員との懇談会等で、学生生活や進路、また音楽について語り合える場を設ける。

②教員採用試験のために、これまでにもまして「各種実技指導、音楽理論、小論文指導、面接指導、模擬授業、授業案作成指導等」全コース教員協力のもと支援体制を充実させる。

2. 点検・評価

教育支援について:①第1コア授業では、音楽を教えることの本質的な意味と、音楽授業の基礎的となるソルミゼーションの意味とスキル、歌唱教材の分析と歌詞の範読、発問という教授スキルのイメージに焦点化して授業内容を構成した。教育実践という見地から、音楽科教育のエッセンスを特定し、音楽授業や音楽教師のイメージが芽生えるように指導内容を工夫した。また我が国における音楽科導入の歴史とその理由などを学生たちと共に考察し、音楽科の存在理由について考えた。②第2コア授業に関して、初等中等教科教育実践Ⅰでは、一冊の教科書と指導者の範唱、範読、指揮、語りかけや問いかけだけで、模擬授業を試みる演習を行い、音楽の学習指導の中核的な技をイメージすることができるよう指導内容を工夫した。初等中等教科教育実践Ⅱでは、歌唱教材の教材研究の方法と伴奏の方法についての演習を行った。初等中等教科教育実践Ⅱでは、中学校の音楽教材を扱い、より高度な教材の分析と模擬授業を行い、学習指導の技の演習を深めた。また、このコア科目の授業の中で、キャリアノートの記載の仕方について、繰り返し指導を行った。初等中等教科教育実践Ⅲでは、音楽科教育学担当の教員と作曲担当の教員がTTで授業を行い、双方の専門的な立場から中学校教材の楽曲の中にみられる音楽の特性と教材としての特性について講義し、これらを統合し応用する場として、模擬授業によるシミュレーションを試みた。また教育現場の教員との連携を深めながら、教育実習に十分対応できる教育実践能力を高めていくことができた。また学修キャリアノートの充実を図り、教職実践演習へのスムーズな連結を図った。

学生支援について:①クラス担当教員として、コース教員がそれぞれの学年で学生と懇談会を行った。また1年次生のクラス担当教員として、宿舎に参加し、前期の授業の後半期に個人面接とクラス懇談会を実施した。また、授業の前後に、大学生活に関わる諸注意や諸連絡を行った。②小論文やエントリーシートの執筆に関する添削指導を個別に実施した。就職支援事業の行事において配付された面接や集団討論の問題例を学生たちにも提供し、情報を収集し、知識を獲得するように指導した。また、授業の中でも、模擬面接や集団討論の演習を実施した。学部3、4年次生の希望者に対し、「弾き歌い」及び「教育課題ディスカッション」の補習事業を毎週時間を定めて実施した。教員採用試験で聴音が課される学生に対して授業時間外に特別指導を行なった。採用試験でリコーダーの試験がある学生に対して具体的な演奏法や初見演奏の指導を行った。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

本コースでは、教員一人ひとりの専門分野における研究を尊重すると同時に、これらを基盤として、全教員が一丸となって音楽科の教員養成を具体的に展開するために必要な授業計画や指導法の研究を工夫してきた。このような体制を維持しながら、音楽科授業実践力の育成をめざした教員養成コア・カリキュラムを有効に生かすために、さらなるFD推進の可能性を検討する。

- ①各教員が余裕をもって研究に従事できるような環境及び協力体制をつくる。
- ②「学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」を構想し、科学研究費補助金の申請を行う。
- ③コア・カリキュラムに基づいた授業実践の具体的な検討や「教職実践演習」に向けての指導体制の検討を通して、PDCAサイクルを生かしたFDの可能性を検討する。

2. 点検・評価

①コースとして、各教員にできるだけ雑務を増やさないような体制作りを推進した。②今年度も、音楽コース内でのコア・カリキュラムを構想するために、「学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」を構想し、科学研究費補助金の申請を行った。③学修キャリアノートを活用していくために、前期の授業の前半を終えた時期に執筆の練習を試み、学修経験の要約と意味づけが適切に執筆できるようにガイドを開始した。また、学部3年生にも、就職活動のために、学修キャリアノートの一部をコピーして、執筆の演習を試みた。コア科目の実践において、これまで試みる事がなかった初年次教育に着目し、キャリアノートの活用を念頭に置きながら、授業内容を工夫した。そして、その成果をFDのシンポジウムで報告した。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

コース内の教員人数が定員限度になる中で、各教員がそれぞれの立場で、部会や各種委員会等における役割・任務を十分に果たせるように、コース内の協力体制を整える。

- ①コース内の連絡等が迅速且つ十全に行えるよう、メール等の有効活用を促進する。
- ②コース内の役割分担を明確にし、無駄を省くようにする。
- ③コース内の電力等の省エネを促進する。

2. 点検・評価

①コース内の連絡は基本的にメールを用いて行うようにし、教員が学外にいる場合でも迅速に連絡等が行えるようにした。②コース内での役割、たとえば演奏会関係、練習室関係、教育機材関係、書記・会計等を教員で分担し、効率よくコース内を運営した。③講義室や研究室の電灯を最小限の点灯に留めることを実行した。授業中の、研究室における室温の管理を頻繁に行っている。研究室の照明(蛍光灯)を常に半分消灯し、可能な限り、エレベーターの使用を避ける等の努力を行った。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

本コースの専門性と人的資源をもって附属学校・社会との連携や国際交流を展開することによって、教育・文化面で広く社会に貢献すると同時に、そこから逆に様々なニーズや視点を得ることによって、自らの教育・研究のあり方を客観的に捉え直す機会とする。

- ①附属小学校・附属中学校の研究発表会や教育実習指導、授業支援やLFタイム及び「教育実践フィールド研究」等を通して、附属学校との連携を深める。
- ②公開講座を、現職教員及び一般社会人等を対象に開講する。
- ③教育支援講師・アドバイザーをはじめ、協力要請に応じて積極的に幼稚園、小学校、中学校、高等学校等に出向き、指導・助言等を行う。
- ④留学生を積極的に受け入れるとともに、コースとしての留学生への支援体制を充実させる。

2. 点検・評価

①附属小学校と附属中学校の研究活動に参画し、研究大会当日は、助言を行った。また、教育実習生の研究授業にも参加し、助言を行った。附属中学校の要請で総合学習の時間「日本の伝統音楽」において附属中学校の教諭と協力して三味線と伝統打楽器を使用して「阿波踊りのぞめき」を教材として授業支援を行った。教育実践フィールド研究と附属中学校のLFタイムをリンクさせ、大学院生によるアウトリーチ活動を行ない、そのための指導を行った。②「楽しい歌唱教室」を9月に開催した。免許更新講習として「音楽授業における指導と評価のスキルアップ」、10年次経験者研修として「言語活動の充実に着目した音楽授業の工夫」の講座を開催した。③阿南市小学校音楽部会、徳島市中学校音楽部会の夏季講習会で講師として講演を行った。「平成23年度鳴門市生涯学習まちづくり出前講座」として、鳴門市の要請で「優元快舎とこちゃんku」(鳴門市撫養町)において「影絵と地域の民話を活かした音楽劇作品」と題して講演した。第34回全日本おかあさんコーラス四国支部徳島大会審査員およびサンポート高松デビューコンサートの審査員を務めた。④韓国からの留学生に対して、修士演奏及び修士論文の指導を行った。特に日本語での論文については、授業時間以外にもメールを活用し、学生本人が無理なく作業が進められる体制をとって指導した。中国からの留学生(大学院)を1名受け入れた。教員全員が日常的に、コース所属の留学生との情報交換を行った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

芸術系コース(音楽)の教員数は現在7名で、設置審ベースの限度数で且つ音楽科教育の教員が一人足りないという状況に置かれている。そのような厳しい状況の中で、さらに1名は副学長として執行部の仕事を兼務しており、コース運営にとって教員一人ひとりの自覚と責任がより一層求められる年度であった。しかし、コース内の緊密なチームワークによりこのような難局を乗り越えることができたと自負している。大学院の定員充足に関しては、ほぼそれに近い数の学生を受け入れることができた。また、大学院の教育では、コア科目である「教育実践フィールド研究」において、音楽コースの特色を生かし生の音楽を附属中学の生徒に提供するという新しい試みを行い、附属中学から大変喜ばれ、音楽コースの学生にとっても大きな自信となって還元することができ、大学院における各学生の研究に弾みをつけることになった。さらに、教員採用試験に向けた支援として、音楽コースの教員は採用試験において音楽実技がある全コースの学生に対して要望に応じてケアをしており、採用された他コースの学生を通じて、大学に大きな貢献を果たしたものと考えている。